

F U E K I

福武文化賞、福武文化奨励賞
「おかやま」の未来を想う



岡山の文化の向上に貢献された人々にお贈りしました。

第16回福武文化賞 原田マハ

第16回福武文化奨励賞
高本敦基、中桐望、日名川茂美、
横仙歌舞伎保存会



贈賞式で活動を披露！

福武文化賞は岡山県の文化の向上に著しく貢献した個人または団体、福武文化奨励賞は今後貢献が期待される個人または団体にお贈りしています。昨年11月にJunko Fukutake Hallで開催した式典では、受賞者の皆様に活動を紹介していただきました。



Photo:Daisuke Aochi



小説家

原田マハ

大原美術館が登場する「楽園のカンヴァス」やモネ、マティス、ドガ、セザンヌを題材にした「ジヴェルニーの食卓」など小説を通してアートと一般の読者をつなぐ役割を果たした意義は大きく、文学とアートを両輪にしたユニークな活動、業績、発信力は高く評価されています。「でーれーガールズ」では、多感な時代を過ごした岡山の情景を描きその魅力は地域の活性化に大きく貢献しました。



原田マハ氏には、「アート、文学、おかやま—私を育んだ岡山の文化」と題した講演をしていただきました。



「私をここまで導いてくださいました皆様にとても感謝しています。岡山は私にとってサンクチュアリのような……っておきたい心の聖域です。長い時間小説を書いたり、取材に行ったりと忙しい日々を過ごしているとき、ふと「この世界に岡山がある」という言葉が浮かびます。…私には岡山があるじゃないかと。心の中では一番近い場所。路面電車の揺れるリズムとカタソコトという音は、私の身体に刻み込まれています」と始まり、小学校6年生から過ごした岡山の日々や初めて行った大原美術館で受けたピカソとの衝撃的な出会い、岡山が誇る画家・国吉康雄の作品との思い出、現代アートの島・直島に感動したこと、世界に誇れる瀬戸内国際芸術祭の話に至りました。

「岡山でのアート体験は、私の人生に大きな光を投げかけてくれて、いつかアートにかかわる何かがしたいと思い続けていました。と同時に、岡山にいたときは一番多感な時期でもあり、兄の影響もあってさまざまな文学を読みました。高校生のときには、いつか小説を書いてみたいという思いが芽生えました。本当に岡山という場所を誇りに思っています。この世界に岡山がある幸運をこれからもずっとかみしめ、書き続けていきたいと思います」



美術家

高本敦基

気鋭の現代アート作家であると同時にアートプロジェクトを企画運営するなどプロデュースにも取り組み、単なる一個人のアーティストとしてではなく、地域社会と暮らしに根ざした制作、プロジェクトを行い、新たな文化創造のキーパーソンとしても注目を集め、今後益々の活躍が期待されています。

高本敦基氏には、作品の写真と素材の展示をしていただきました。

「これまで応援していただきました皆様に感謝を申し上げます。文化や楽しいことを暮らしに取り入れていく勝山で、温かく見守られながら、時には忠告をいただきながら岡野屋旅館プロジェクトの活動を行っています。作家活動では洗濯バサミやモールなどで作品をつくりています。日常にあるなんでもないモノを、技を使って人間が生きていることを喚起するモノを創造すること、それが現代美術だと思っています」



ピアニスト

中桐 望

しなやかで香しく、瑞々しい音楽性の評価は高く、世界へ飛び立つ期待の新鋭として最も注目されています。オーケストラと共に演奏するコンサートや岡山をはじめ全国でリサイタルを開催しクラシックの普及にも積極的に取り組み、岡山が誇るピアニストとして今後益々の活躍が期待されています。

中桐望氏には、ピアノ演奏を披露していただきました。

「現在はポーランドで勉強しております、故郷岡山での演奏がなかなかできない状況の中、今回このような賞をいただき本当に嬉しく思っています。今日は全面ガラス張りの解放感あふれるホールで、故郷ポーランドに強い想いを持っていたショパンの作品の中から哀愁にみちたワルツと『英雄ポロネーズ』を私の故郷愛と重ねながら表現ていきたいと思います」



岡山県認定作州紺製作者
作州紺保存会会长

日名川茂美

紺と白を基調とした幾何学模様や縁起物を織り込んだ絵紺である岡山県郷土伝統工芸品の作州紺の復興に向け、染めと機織り技術を一から学び長年研鑽を積む真摯な姿勢は高い評価を得ています。伝統工芸伝承の普及と後継者育成に多方面から取り組み、今後益々の活躍が期待されています。

日名川茂美氏には、作州紺保存会の皆様と一緒に活動を発表していただきました。

「作州紺をなんとか県北の津山地域に残したいなという気持ちだけで始めた活動をこんな素敵なホールで皆様にお伝えすることができてうれしいです。県から認定を受けたときに、私が織っていたらこの紺は次に繋がらない、まずは人材育成だと思いました。これからも作州紺保存会の仲間と、次世代に伝えていくために活動をしていきたいと思います」



横仙歌舞伎保存会

江戸時代から途絶えることなく続く「地歌舞伎」の姿を現在に伝えるものとして昭和41年に設立。奈義町では歌舞伎専門職員を採用するなど存続に向けて町を挙げた取り組みを行い、今日まで継承されています。長きにわたる活動は岡山県の伝統芸能の範となり地域文化の向上に果たした役割は高い評価を得ています。

横仙歌舞伎保存会には、「義経千本桜」の一場面を披露していただきました。

「岡山の文化の最先端にいらっしゃるような皆様の前で、披露できること光栄に思っています。いろいろな会場で公演していますが、水槽のようなホールは初めてで、私たちも楽しみました。今回、大道具は切り株しかございませんが、満開の吉野の千本桜を想像して観ていただければと思います」



「おかやま」の未来を想う①

「おかやま」が好きで、「おかやま」を考え、「おかやま」の未来を想う情熱ある若者たちがいます。この「おかやま」を愛してやまない2つの若者たちの取り組みを紹介します。若者たちの情熱の芽が大きく育つよう財団では大切に見守っています。

若者と大人が出会うことが、 地域の未来をつくる

NPO法人 だっぴ

代表理事・柏原拓史さんにお話を伺いました。

——だっぴ50×50という活動をされていますが、具体的にはどんな内容ですか。

若者と大人が生き方や働き方について本音で語り合い、意見交換をするプログラムと場の提供です。若者が50人、大人が50人という構成で行います。「人が出会って刺激を受け、何かが動き出す。」この繰り返しが新しい未来を創ると思うのです。私たちはそういう出会いとコミュニケーションの場とプログラムを提供しています。

内容は参加者がお互い打ち解けるためのアイスブレークから始まり自己紹介、それぞれ10人程度のグループに分かれてテーマに沿っての意見交換。グループを変えてそれを3～4回繰り返します。その都度、お互いのことをフラットに知り合い、語り合うことで新しい出会いがあったり発見があったりします。最後に全体での意見発表をし、参加者やゲストの感想を共有しながら自分の感想と向き合うことで思いを整理してもらいます。全体で5時間ぐらいのプログラムですが、みんな一生懸命になっているので短く感じられるようです。



——話し合うテーマにはどんなものがありますか？

中学生だっぴ、高校生だっぴ、大学生だっぴなど多少は違いますが、最初は打ち解けるように「一番欲しいドラえもんの道具は？」「好きな歌の歌詞を教えてください」などから「今の仕事を選んだ理由は？」「仕事をしていてやりがいを感じる時」「自分にとっての豊かな働き方は」……というように次第に深めていきます。



——参加者の反応や感想はどうですか？

だんだんと時間がたつにつれ、参加者の顔つきが変化していくのがわかりますね。最初のころの不安と期待に満ちた緊張した顔がトークセッションをしていくといつの間にか真剣な顔へと必ず変わります。

毎回、会の前後で同じ質問のアンケートを書いて振り返りをしてもらうのですが、若者からは「大人になるのが楽しみ」、とか、「働くことが楽しみ」、「社会をより良くするために社会の問題に関わっていきたい」、「自分の将来に希望が持てる」、「自分の未来は自分で働けば変えられると思う」「私は、私の住んでいる地域が好きだ」…など、肯定的な感想・意見の割合がぐんと増えます。

「生き生きとしたかっこいい大人がいることに感動した」、「今日一日の時間は人生の革命でした」「自分だっ



て本気を出せばこんなに喋れるんだと思った」「想像以上に世界は自由だった」「君の強みは若さだよ、って言われ失敗しても全然いい。怖くても頑張ろうと思えた」…毎回、こんな感想を書いてくれるんです。これも、参加者全員が、ひとりひとりと真剣に向き合うからでしょう。自分の言葉で腹を割って話せる場があり、それを周りがきちんと聞いてくれる喜びが感じられる、そういう場だからこそでしょう。本当に嬉しいですよ。

——最後に、今後、どのように活動していきたいと思っておられますか？

自分の殻を脱ぎ捨てる瞬間を応援したい、岡山を愛する若者を育てたい、という思いで始めたのですがそれは今も変わりません。中学生には地域の魅力的な大人の生き方や学生ボランティアに触れ自身の将来を考える機会に、高校生には地域の魅力的な大人としっかりとつながり、関わりを持てるような場に、大学生には将来の地域人材の資源として、大人と関わりながらボランティアなどで地

域で行動して欲しい。そして将来、社会を動かせるような人になって岡山で活躍して欲しい。

この「だっぴ」の活動を通して中学生から高校生へ、そして大学生、岡山の社会人へ…そんな人とひとのつながりが将来の岡山に役立つようなプログラムや仕組みを作りたいのです。

そのためには、この活動を多くの方に知っていただき、色々な方に応援していただきたいと思います。

岡山を愛する元気な若者を育っていく、その心意気と活動がよくわかりました。「晴れの国・おかやま」がもっと元気になるよう、この取り組みに賛同していただける方が増え、「岡山が大好きな若者」がたくさん育つことを期待しています。(平山竜美)



柏原拓史／かしはらたくし
NPO法人だっぴ 代表理事

岡山市生まれ。名古屋大学大学院（理学研究科）修了後、日本気象協会に入社。その後、より地域に根差した生き方をするため岡山県環境保全事業団に転職。環境教育の普及や人材育成の業務を通じた地域貢献を模索する。環境保全や地域貢献を行う大人や若者がもっと繋がるべきだと考え、28歳の時に有志で「かいわれの会」を立ち上げ勉強会やイベントの開催を始め、現在のNPO活動につながる。
<http://dappi-okayama.com>



「おかやま」の未来を想う②

高校生が考える未来 岡山高校生会議



運営リーダー・松田はるかさんにお話を伺いました。

—高校生会議について教えてください。

地域のこと、自分のことを考える機会を自ら作ろう、という思いつきが原点となっていて、会には岡山を拠点に活躍する大人を招き、さらに岡山をよくするには何が必要か?何をすべきか?自分たちに何ができるかを中心に話し合います。「会議」というと、硬いイメージがあるかもしれません、お菓子をつまみながら、楽しく意見を出し合える場です。

これから時代は、勉強に+aとして、学生時代にいかにたくさんの人と繋がり、どんな社会勉強をしているかが求められます。あらゆるジャンルの方と交流ができ、イベントなどにも呼んでいただき、人脈もどんどん増えていきます。自分たちの地域について、また自分自身についていろんな見方ができるようになり、どんな方とも対等にお話させていただくことで自信もつきました。高校生の期間はとても短いですが、高校生会議という場でたくさんの刺激を受けています。先輩や友達からの紹介で参加する人が多く、岡山県下のほとんどの高校生が、高校生会議の存在自体を知らないというのが現状ですが、ここに来ればいろんな考えを持った友達がたくさんできるし、仲間がいるということを感じもらいたいですね。

—具体的にどのような活動をしているのですか?

11月に開催された第7回岡山高校生会議の一日を紹介します。

9:00-	運営集合・会場準備
9:30-	受付開始
10:00-	開会・高校生会議についての趣旨説明
10:05-10:25	アイスブレイク
10:25-10:45	講師紹介
10:45-11:50	ディスカッション①
12:40-13:40	ディスカッション②
13:50-14:50	ディスカッション③
15:00-16:00	参加者からの一言・アンケート記入
16:00-17:00	閉会



運営リーダー・松田はるかさん

趣旨を理解していただいた後、肩の力を抜く作業として今回は自己紹介を兼ねたビンゴゲームをしました。大変盛り上がり、参加者同士もあつという間に打ち解けました。

岡山を拠点に活躍する様々な職種のゲストスピーカーを囲むディスカッションでは、お話を伺った後に疑問質問が飛び交います。仕事のやりがいは何か、苦難をどう乗り越えたか。高校生のとき、どんなことを考え、何をしていたか。進路、就職先はどうやって決めたか。ゲストは尽きない質問に真摯に向き合い、丁寧に答えてくれます。異なる経験や見解を伺うことで、何を吸収し、どのように生かすかを考えさせられます。参加者は、年齢、性別、職種に関係なく、同じ体験を通して、たった一日の



限られた時間で得るもののがとても大きかったと実感しているだけなのではないでしょうか。

—参加した感想を教えてください。

「正直、岡山はダサいと思っていた。岡山を拠点に活躍している方の話から、岡山をもっと知り、好きになりました。県外の方にも岡山を誇れるようになりたいという思いが生まれてきました。生まれ育った岡山に自信がつき、岡山にいる自分自身にも自信がつきました」「自分の通う高校だけの狭い世界から、他の高校や大人と、進路や人間関係などについて語る機会ができた。友達も増え、理解して協力してくれる大人がいることに気付いた」「岡山高校生会議の名称が怪しいと思っていたが、疑いながらも参加してよかったです。自分がどうなりたいかを掘り下げて考えることができ、ゲストの意見や話を聞き、自分の夢を実現するためのヒントを得た」「学校では聞けないアドバイスがたくさんあった。失敗しても、乗り越える方法をたくさんの方が知っているということが分かった」「自分をいかにアピールし、自分の強みをどうプレゼンするか。国際人として、世界に打ち勝つには何が必要か。意見を出し合うことで、社会という大舞台に出る前の練習ができたような気がする」などです。



—これから何を仕掛けていこうと考えていますか?

運営の中心メンバーは毎年交代します。「思いや考えは異なるもの。運営の形もこだわらず変えていけばよい。」という先輩から受け継いだ岡山高校生会議のスピリットを守りながら、自分たちの許容範囲で何ができるかを考え、身の丈に合った活動を継続してきましたが、これからは少しずつ背伸びをしながら、より広い視野を持って活動を拡散し、自分たちの代に合った改革を進めていきたいと考えています。

近い将来、岡山県下の高校全てに高校生会議のメンバーが存在するよう、各校の生徒会との連携を検討しています。全国に岡山をPRするためには、NPO団体、さらには市長や県知事とも組んでいける面白さではないかと考えています。自分たちの活動を、岡山をよりよく変えていく原動力にして、もっともっと岡山を盛り上げていきたいと思います。



スタッフは全員高校生。企画から運営まですべてを行って、高校生の高校生による高校生のための考える会が岡山高校生会議。取材したときにも現役生が先輩たちや大人のゲストと熱い論議を交わしていました。岡山でどんな未来を描けるか、岡山でどんな面ができるか。自分たちの住む地域について知り、考え、伝える。生き生きとした高校生たち、輝いて見えました。

(兒子絵里子)

岡山高校生会議

自分たちの住んでいる街について真剣に考えたい、という高校生が集まり2013年に誕生。自分たちに「柔軟な発想」という武器があるなら、それを使わなければもったいないし、伸ばす場も必要との思いは先輩から後輩へと脈々と受け継がれている。会議のテーマは芸術、外国人、自然環境、つながり、未来、職業、まち、世界…など様々。年2回の会議を開催しており、これまでの7回で延べ300人を超える高校生の参加を数える。

助成対象者にはさまざまな人がいます。地域でユニークな活動をしている人、伝統や歴史を掘り起こしている人、地域資源に新しい価値をみつける人。この「FACE」ではそんな人々に会いに行きます。

教育と文化のあいだをとりもつ



公益社団法人 岡山県文化連盟

文化人材バンク学校出前講座、おかやま県民文化祭、天神山文化プラザなどの事業を実施
<http://www.o-bunren.jp/index.html>

高田佳奈(たかたかな)／(公社)岡山県文化連盟 職員
1978年生まれ。岡山市出身。岡山大学法学部法学科卒業。2008年岡山県文化連盟採用。文化人材バンク学校出前講座チーフコーディネーターとして県内公立小中学校で年間約200件開催される出前講座の企画、調整、運営にあたる。

おかやま国民文化祭(2010)を契機に設立した岡山県文化連盟(以下文化連盟)は、岡山県内の中心的な文化団体をまとめ・つなぎ・つなぐために、芸術文化活動を様々な事業で応援しています。文化・芸術の優れた指導者を小中学校を対象に派遣している文化人材バンク学校出前講座(以下学校出前講座)は、年々活用する学校が増えてきています。担当している高田佳奈さんにお話を伺ってきました。(和田広子)

学校出前講座は文化連盟を立ち上げたときから実施していた事業で、今年で10年目になります。初年度(18年度)は、約30校、約2800名だったのが、26年度は約200校が利用し、約6800名の児童生徒が体験しました。講師は、文芸、音楽、美術、書道、茶道、華道など多分野に約380名が登録しています。一度、体験した学校の多くは、リピーターとなっています。

高田さんの仕事は、学校の要望をヒアリングし、どのような講座にするか講師と話し合い、日程調整や現場の立ち会いなど学校側と講師側の調整をするコーディネーター。講座がより効果的に運営されるよう心掛け、1年間で約100校を担当します。始めた頃は、学校の実情や先生の状況が分からぬうちに、各文化団体との連携もうまく図れていなかったので、お叱りを受けて、落ち込んだ日々もあったそうです。

文化に携わる仕事を選んだきっかけは、中学生のときに出会った美術の先生の影響が大きいという。「心がすごく動いた体験は何ですか?」「この絵をみてどう思いますか?」という問いかけの授業に衝撃を受けたそうです。「今思えば、その先生が大切にしていたことは、知識を豊かにすることや絵が上手に描けることではなく、自分のモノの見方や考え方を整理することだったのかなと。」

学校がリピーターになる理由は「ワイン・ワイン」の関係。講師は、学校に入ることによって、現在の子どもたちの特性やアプローチの仕方などの気づきや発見をします。また文化の普及や育成にもつながっています。学校側には、専門性の部分を補う学校教育の補完として活用してもらいます。先生も子どもたちと一緒に体験し、座学でない体験の重要性を感じることができます。「世界が広がった瞬間の子どもの表情をみたとき、それまでの苦労が報われますね。」と高田さんの笑顔からは充実感が伝わってきました。

「役割は何ですか?」と聞いたら「通訳かな。教育と文化のあいだをとりもつ人です。」と答えが返ってきました。学校出前講座は子どもたちに本物の文化体験をさせるだけではなく、教育と文化の懸け橋となっていました。

国吉康雄回顧展観察ツアーに参加して

多様なアプローチと 作品そのものの多様性



広島市立大学大学院 芸術学研究科
造形芸術専攻絵画研究分野 博士前期課程

ゆほ
奥田 悠歩

このたび私は、スミソニアン博物館(米国・ワシントンDC)の施設のひとつであるアメリカン・アート・ミュージアムで「国吉康雄回顧展」を鑑賞・見学しました。展覧会のコンセプトは、国吉の死後、アメリカにおいて彼の存在と価値が忘れられつつあることを問題とし、展示を通じて彼の再認識および再評価を狙うというものでした。そのために年齢、職業、目の見えない人、耳の聞こえない人、国吉を知っている人、知らない人……これらを問わずさまざまな人に国吉の魅力を伝えるための努力が成されていました。それは長い期間をかけて、そして作品の展示だけではなくイベントやワークショップ、レクチャーを通じて、彼が何者であるのかを生まれた場所のレベルで示すところからはじまります。

展示作品は国吉の作品がなにに影響され発展したのか明確に表れているものが選ばれており、鑑賞者の言語を問わず、目で見てその変化を理解できるように組み立てられていました。また、日本の伝統である太鼓の演奏を用意したイベントを開催し、参加者が国吉のルーツである日本についての知識を体感によって得られるような取り組みが行われていました。さらにレクチャーでは、国吉自身の伝記的要素を含め、彼や彼の作品がどのように始まり変化していったのかという知識を言葉で出席者へ提供し、考えることのできる機会が設けられていました。

ひとりの画家を理解するにあたり多方面からのアプローチが必要なのは当然ですが、そのためには伝えたいたい内容に即してバリエーションに富んだ手段が必要ということがこれらの活動から分かりました。また、多様なアプローチ手段が作品理解を促すと同時に、作品そのものの多様性を見る者へ示すということを学びました。この「多様性」は絵画だけでなく芸術理解の醍醐味だと思います。教育者を志す私ですが、この先美術教育を通じて、このたび学んだ事を参考に多くの人にこの醍醐味を伝えて行きたいと思っています。



スミソニアン博物館所蔵の国吉康雄のアーカイブ見学

家族の肖像 —— 杉浦慶侘

先日、金工作家の佐故龍平さんに会いに行きました。

彼は花器や茶道具を銀などの材料から作る30代後半のまだ若い作家です。その年齢に見合はず彼の代表的な技法は杢目金(もくめがね)といわれる江戸時代に発展した高度な技法だそうで、金属を彫り叩くことによって生まれる木目のような独特の文様が特徴的です。

岡山市街から少し離れた静かな一軒家に彼は暮らしています。早速作業場を見せてもらうと、数百はあるだろう大小さまざまな専門道具に囲まれたなかで実に細やかな工程を経てひとつの作品が生み出されることを知りました。

彼のポートレート撮影が終わり引き上げる準備をしていると、生まれて間もない子どもを抱いた奥さんが出てきてくれました。

その時、彼は真剣な作家の顔から目尻の下がった父の顔に一変しました。子どもをあやす姿はどこにでもいるお父さんそのもの。私はしまいかけていたカメラをもう一度引っ張り出し家族に向けてシャッターを切りました。

美術の世界で作家として活動し、家庭を持ちながら生活していくのは本当に大変だろうと思います。それは単純に労働や時間に対する対価ではなく、美しさという抽象的評価に対する対価だからです。その険しい道を彼はこれからも歩んで行くのでしょう。家族を支え、時には家族に支えられながら。

いま私の手元にはあの日最後に撮った写真があります。この仲良く3人並んで笑っている一枚を小さな額に入れて贈ろうと思います。ささやかなエールを込めて。

すぎうらけいた／写真作家 1980年岡山県生まれ、津山市在住。2005年に津山市へ帰郷して以来、活動拠点を地元・津山とし、自然と人間の関係をテーマに制作を続けている。2008年「GEISAIMUSEUM#2」、ヴィクトービンチュック賞、「GEISAI#1」銅賞／2009年「J氏賞選考作品展」大賞／2010年福武文化奨励賞



写 真 の 人 佐故龍平

さこりゅうへい／金工作家 1976年玉野市生まれ。材質の異なる金属版を重ね、その地金をたたき延ばして成形、表面を削って木目調の模様を出す木目金の技法に取り組む。素材選びや技法などにおける常識にとらわれない創意や新鮮なデザインセンスが高い評価を得ている。2005年福武文化奨励賞受賞。

Editor's Column

▼「文化」は人間が人間らしく生きるために糧とかと言われます。

最近のニュースに見るテロ犯罪、紛争による破壊、そして難民の表情……。そこに文化的要素は微塵も感じられません。文化は国の平和と人々の暮らしの成熟さから生み出されるもの。今年度も福武文化賞・文化奨励賞受賞者が決まりました。県、国内外で活躍されている4氏1団体。その道に精進しておられる姿にオーラを感じるとともに、世の中に諂ひのない平和な世界を願わずにはいられませんでした。

▼これまでどちらかというと若者たちとは少し距離を置いて、斜めから見ていた自分がいたのですが、今回の取材で久しぶりに若者の息を間近で感じました。彼らの吐く息は熱く、目は澄み、未来を見つめていました。がんばれ岡山の若武者!!“桃太郎エネルギー”(H)

機関誌

不 易

F U E K I

vol.59 2016.1.25 (次号は5月25日発行)

題名「不易」には、「時代を超えて優れたものに共通する本質的なもの」を大切にしたいという谷口澄夫初代理事長の思いが込められています。

編集・発行：

公益財団法人 福武教育文化振興財団

〒700-0807 岡山市北区南方3-7-17

株式会社ベネッセコーポレーション本社3F

TEL 086-221-5254 FAX 086-232-3190

URL <http://www.fukutake.or.jp/>

E-mail eczaidan@fukutake.or.jp

制作：

株式会社 吉備人

デザイン：

田中雄一郎(QUA DESIGN style)

印刷：

広和印刷株式会社



人づくり、地域づくりを応援します
公 益 財 団 法 人 福 武 教 育 文 化 振 興 財 団

FUKUTAKE
EDUCATION AND CULTURE
FOUNDATION